

日本都市計画学会

学 会 賞

特別功勞表彰 功績賞・国際交流賞

2022年 年間優秀論文賞

受賞一覧ならびに授賞理由書

公益社団法人

日本都市計画学会

目 次

1. 学会賞

1) 受賞作品	1
2) 選考経過	2
3) 授賞理由	3

2. 特別功労表彰 功績賞・国際交流賞

1) 受賞者	7
2) 選考経過	8
3) 授賞理由	9

3. 2022年 年間優秀論文賞

1) 受賞論文	11
2) 選考経過	11
3) 授賞理由	12

日本都市計画学会 学会賞受賞者・受賞作品

(受賞者敬称略)

<石川賞>

東京都の事前復興対策とそれを牽引した復興訓練の継続的展開

中林 一樹
東京都都市整備局

<計画設計賞>

浸水対応型市街地構想、及び、それに至る取り組み
—気候変動への市街地の適応（高台まちづくり）の展開への布石—

加藤 孝明
塩崎 由人
故 石川 金治
特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり
新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会

長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクト

長門湯本温泉まち株式会社
長門湯守株式会社
長門湯本オソト活用協議会
長門湯本温泉観光まちづくり推進会議
長門湯本温泉観光まちづくりデザイン会議

<論文奨励賞>

構築費用の空間的差異と移動費用を考慮したネットワークデザインに関する研究

田端 祥太

柔らかな市街地における地域マネジメントのプロセスと形態に関する研究

青木 公隆

観光まちづくりにおける地域遺産の成立と発展

津々見 崇

眺望都市・京都における京都の風致施策の萌芽と発展に関する歴史的研究

谷川 陸

持続可能な景観マネジメントに関する研究

高木 悠里

日本都市計画学会

学会賞 選考経過

2022 年度学会賞は、会員が推薦した石川賞候補 2 件、計画設計賞候補 2 件、論文賞候補 1 件、論文奨励賞候補 6 件、計 11 件が審査の対象となった。

表彰委員会（学会賞選考分科会・委員全 16 名）は各々の候補の業績について複数の担当審査委員が独立に査読および調査を実施し、各委員から提出された評価にもとづき、分科会で慎重に検討の結果、授賞候補を選定した。

特に評価の分かれた案件については委員会席上でその結果を照合、討論、協議し、分科会の最終審査結果とした。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、石川賞 1 件、計画設計賞 2 件、論文奨励賞 5 件の授賞を決定した。

(参考)各賞の授賞対象

石川賞

都市計画に関する独創的または啓発的な業績により、都市計画の進歩、発展に 顕著な貢献をした個人または団体を対象とする。

計画設計賞

都市計画に関する計画、設計、事業などに関する近年（概ね過去 3 年以内）の作品で、都市計画の進歩、発展に顕著な貢献をしたものを対象とする。

論文賞

都市計画の進歩、発展に顕著な貢献を認められる研究論文を近年（概ね過去 3 年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

論文奨励賞

都市計画に関する将来性・発展性が顕著な研究論文を最近（過去 1 年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

石川賞	
作品名	東京都の事前復興対策とそれを牽引した復興訓練の継続的展開
受賞者	中林 一樹・東京都都市整備局
授賞理由	<p>受賞者の一人の中林一樹氏は、阪神淡路大震災の経験を踏まえて、事前復興という新しい防災・復興都市計画の考え方を提唱し、東京都とともに数多くの実践に取り組み多大な成果をあげてきている。対象作品は、以下の点で極めて高く評価できる。</p> <p>第一に、阪神淡路大震災の経験を踏まえて、従来、復興は震災後に取り組むものという考え方を改めて震災前に準備し備えるという事前復興を提唱するとともに、多くの継続的な実践を通じて、事前復興の考え方を具現化していったこと。具体的には、条例（東京都震災対策条例）、復興マニュアル（震災復興マニュアル復興施策編及び復興プロセス編・区市町村震災復興標準マニュアル）等を策定し、前例がない中で地方公共団体が備えるべき制度・計画体系を示したこと。</p> <p>第二に、復興マニュアルの策定をゴールとすることなく災害復興業務に関わる人材育成も重視し、復興訓練（都市復興訓練・復興まちづくり訓練・復興まちづくり実務者訓練）も実践し、訓練プログラムの開発と実践にも取り組んだこと。訓練参加者は、都市復興訓練で約 1,900 人の区市職員、広域都市復興訓練で約 200 人の都職員、復興まちづくり実務者訓練で約 200 人の区市職員が参加し、継続的な展開のもとで数多くの行政職員に対する人材育成の実績をあげていること。</p> <p>第三に、これらの東京都における総合的かつ継続的な実践の成果が広く公開されることによって、事前復興という先進的な考え方が全国的に普及することになり、現在では多数の地方公共団体の防災・復興まちづくりのステップアップに繋がっていると考えられること。</p> <p>日本は自然災害の多い地域であり、持続性のある都市として再編・構築していくためには、災害に備える防災・復興都市計画は、ますます重要な位置付けになることは必至である。本作品は日本の都市計画の発展に顕著な貢献をしていると考えられ、日本都市計画学会石川賞に相応しいと判断した。</p>

計画設計賞

作品名	浸水対応型市街地構想、及び、それに至る取り組み －気候変動への市街地の適応(高台まちづくり)の展開への布石－
受賞者	加藤 孝明・塩崎 由人・故 石川 金治・特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり ・新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会
授賞理由	<p>本プロジェクトは、東京区部東部の海拔ゼロメートル広域高密市街地における新たな防災の計画設計として、地元住民や NPO との協働により「浸水型市街地構想」を提案したものであり、以下の点で優れている。</p> <p>①防災面で深刻な課題を抱える東京区部東部の海拔ゼロメートル広域高密市街地における防災計画設計として、ハード構想とソフトの組み合わせによる「浸水型市街地構想」が新規性を有すること。②構想の策定過程から地元の住民や NPO との協働に取り組み、住民提案型のボトムアップの構想を政策に繋げたこと。③「守る・貯める」「逃げる」に加えて「受け流す」を水害対策に追加することで海拔ゼロメートル広域密集市街地における新たな防災のあり方を提示したこと。④提案された構想が東京都葛飾区において公式な構想として公表され、東京都及び国土交通省の政策にも取り入れられるなど社会的波及性を有すること。</p> <p>以上のように、本件は新たな発想に基づく新しい防災のあり方を創出したものであり、日本都市計画学会計画設計賞に相応しいと判断した。</p>

計画設計賞

作品名	長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクト
受賞者	長門湯本温泉まち株式会社・長門湯守株式会社・長門湯本オソト活用協議会 ・長門湯本温泉観光まちづくり推進会議・長門湯本温泉観光まちづくりデザイン会議
授賞理由	<p>「長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクト」は山口県長門市長門湯本温泉の音信川沿いを中心とした温泉地の大規模なリノベーション事業である。広場、日帰り温泉、レストラン等の整備、川床テラス、飛石等の河川敷利用による整備、沿道でのベンチ整備が主な事業内容である。本事業の特徴は大きく2つあるように見受けられる。一つは、本事業は一度に全てを完成させるのではなく、それぞれの新規施設の整備や建物のリノベーションといったハード事業をライトアップやテイクアウト店の出店といったソフト事業と計画的に連動させていることにある。そのためにいくつかの協議体を組織し「10年程度かけて温泉地ランキングトップ10入り」という共通の目標に向かっている。もう一つは、わが国の伝統的な温泉街では車重視から人重視の歩いて楽しい空間づくりが急務となっている地域は多いが、本温泉地は道路占用や河川占用の問題をクリアし、旧来型の温泉地でも手法によってはウォーカブルな空間に再編成できることを示したことである。以上のように、本事業は、単なる空間改変プロジェクトではなく、総合的な温泉地の先駆的な計画設計事業として大いに評価でき、快適で楽しい温泉地空間を実現したものであり、日本都市計画学会計画設計賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞

作品名	構築費用の空間的差異と移動費用を考慮したネットワークデザインに関する研究
受賞者	田端 祥太
授賞理由	本研究は、ネットワークデザイン問題について、リンクの重み付き長さの総和と平均迂回率を最小化する多目的最適化問題の発見的解法を構築し、その計算事例を提示している。交通等のネットワークを設計する際には、建設費用を少なくしつつ、移動費用も少なくするというトレードオフを考慮する必要がある。この検討において、現実の都市空間では、地形や地物、地価の影響により建設費用が空間的に異なる点が考慮可能なように、既存手法を拡張した方法を構築している。歩行軌跡の重ね合わせで発生する“Desire Path”に着想を得た解法が提示され、大型ドローンの航空路網を対象とした計算事例など興味深い結果が提示されている。都市計画の対象とする交通ネットワーク以外への応用可能性もあり、将来性・発展性も有している。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞

作品名	柔らかな市街地における地域マネジメントのプロセスと形態に関する研究
受賞者	青木 公隆
授賞理由	本研究は、関東大震災後の1925年までに形成された東京区部市街地を土地利用・建物分析を元に類型化し、いわゆる「既成市街地」を「柔らかな市街地(Changeable inner area)」と定義した上で、谷中、裏原宿での市街地変容実態とステークホルダーによるマネジメント実態を詳細に分析している。さらに東京区部における空き家利活用の取組みを「能動的モデル」として分析考察し、千住地域でのアクションリサーチも通して地域マネジメントの方法論の提案に至っている。 東京区部の市街地実態分析、既成市街地マネジメントと空き家利活用プログラムに関するケーススタディ、そして地区再生のアクションリサーチは、それぞれ丁寧に、かつバランスの取れたとりまとめがされており、全体としての学術的価値も高い。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞

作品名	観光まちづくりにおける地域遺産の成立と発展
受賞者	津々見 崇
授賞理由	本研究は、観光まちづくりにおける地域遺産の在り方を問う研究である。はじめに地域遺産成立システム、並びに、マネジメントを、[I.発見・調査][II.評価・認定]の【発見・評価】と、[III.保存・再生][IV.継承][V.活用][VI.監視]の【保存・活用】の6段階に整理しており、これを基軸とした一貫性のある論考が全体になされている。前半では、文献調査に基づいて、地域遺産の扱われ方や位置づけの現況を多様な視点から明らかにした上で、全国32地域の地域遺産活動を大きく3タイプに類型化しているが、とりわけ「主観的遺産探求タイプ」は旧来になく、新たな知見を提示している。また、「奄美遺産」を取り上げた後半では、対象地域の範囲の大小による階層構造の存在や、より小規模な範囲における活動実態の相違など、詳細な事例分析によって多くの知見を得ている。最後には地域遺産成立システムからその発展システムに至る要点について過不足なく記述しており、社会的な有用性も高い。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞

作品名	眺望都市・京都における京都の風致施策の萌芽と発展に関する歴史的研究
受賞者	谷川 陸
授賞理由	<p>本研究は、眺望都市としての京都の風致施策の歴史的展開に着目し、都市の基盤となる山林や水辺をどのように認識し、保護・保全あるいは創出してきたのかを明らかにした論文である。京都三山の開発と眺望保全、風致地区黎明期の制度運用、近代治水と風致の両立、戦後における風致指導・協議の展開という4部構成で、いずれにおいても丁寧に史料に向き合い、実証的な分析がなされている。とりわけ風致地区制度の運用に関しては、許可申請のあった具体的案件を題材に、申請内容と指導・協議内容について図面を用いて詳細な分析を行っており、従来の景観施策史研究の水準を一気に引き上げた点は特筆される。景観の捉え方と協議・指導のあり方、眺望都市・京都の都市像の2点について論じた最後の考察は、実態解明の詳細度に比してやや淡泊であり、今後の継続的な思考が期待される。全体を通じて新たな発見を多く含む優れた歴史研究であり、将来性、発展性も十分に認められる。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しい内容を有していると判断した。</p>

論文奨励賞

作品名	持続可能な景観マネジメントに関する研究
受賞者	高木 悠里
授賞理由	<p>本研究は、市民からの関心も高い「景観」と「エリアマネジメント」をテーマに、その担い手に関する全国調査を実施し、分析した上で、地域景観を向上していく先進的取組みの詳細な事例調査を実施し、「持続可能な景観エリアマネジメント手法」を提案したものである。</p> <p>西宮市、岡崎市、桜井市、大阪市の事例調査は、規模や活動内容には多寡があるが「景観マネジメント」という視点からの位置づけには合理性があり、得られた知見は、都市計画学への学術的な意義が多く認められる。また全国調査と詳細事例調査を踏まえて「持続可能な景観マネジメント」を論じているが、今後のさらなる理論化も期待できる論文となっている。よって本研究は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

日本都市計画学会 特別功勞表彰 功績賞・国際交流賞受賞者

(受賞者敬称略)

<国際交流賞>

城所 哲夫 株式会社アルメック (元 東京大学)

日本都市計画学会

特別功労表彰 功績賞・国際交流賞 選考経過

2023年日本都市計画学会特別功労表彰 功績賞・国際交流賞は、理事・監事・会長アドバイザー会議メンバー各位に候補者の推薦を募ったところ、候補者の推薦があった。これを受け、表彰委員会（委員全10名）が慎重に検討した審査結果を理事会に諮って、国際交流賞1名の授賞を決定した。

(参考)特別功労表彰(功績賞・国際交流賞)の授賞対象

功績賞

長年にわたって都市計画学の進歩、発展に寄与してきた者でその貢献が社会的、学問的に見て顕著な者を対象とする。

国際交流賞

長年にわたって都市計画の国際的交流に携わり海外諸国との交流並びに啓発普及と人材育成に貢献した者（外国人・日本人）を対象とする。

国際交流賞

受賞者 城所 哲夫（株式会社アルメック(元 東京大学)）

授賞理由

城所哲夫氏は、1981年に東京大学工学部都市工学科を卒業、1983年に同大学院工学系研究科修士課程を修了、1994年に東京大学にて博士（工学）を取得された。修士課程修了後は（株）アルメック、国連 ESCAP、国連地域開発センター、チュラロンコン大学都市・地域計画学科（JICA 専門家）等を経て、1996年より東京大学大学院工学系研究科・助教授（2007年4月より准教授）、2019年より教授として、アジア都市計画論を中心とした研究・教育活動に従事し、都市計画論文集や国際誌 Cities、Habitat International 等、国内外で研究成果を発表してきた。東京大学在任中は、100名を超える留学生の博士論文審査を行う等、留学生教育に力を注がれたほか、東京大学 COE「都市空間の持続再生学の創出」等において国際共同研究を先導された。また、チュラロンコン大学在任中には博士課程の設置に貢献する等、氏の研究・教育活動は国内外に大きな影響を与えてきた。

日本都市計画学会においては、2003年から2012年まで国際委員会委員として国際都市計画シンポジウム開催や英文論文審査等に尽力され、現在の Asian-Pacific Planning Societies や英文誌 Urban and Regional Planning Review の礎を築かれた。また、Korea Planners Association の60周年記念国際シンポジウムにおいては都市計画学会より派遣されて招待講演（2008年）、Vietnam Urban Planning & Development Association 主催国際シンポジウム Sustainable Urban Form of Asian Cities にて招待講演（2013年）、Taiwan Institute of Urban Planning 元会長 Kuang-Hui Peng 先生を東京大学客員研究員に招聘して共同研究を実施する等、学会の国際交流活動を先導的に担われたてきた。さらに、1998年より現在も続く研究分科会「アジア都市計画研究会」を立ち上げて代表を務められ、同分科会の活動を通じて、数多くのアジア各国の主要大学教員や政府専門家等を育て、都市計画分野の国際的な発展に尽くしてきた。「特許データを用いた日本における技術的イノベーションの空間分析に関する研究」（共著）では年間優秀論文賞（2019年）を受賞される等、日本都市計画学会における学術活動の向上にも貢献された。

実務では、上述のご経歴に加えて、2000年より現在も JICA 集団研修「国土・地域開発コース」の研修リーダーとして開発途上国の専門家育成に努められ、国際協力銀行や世界銀行、UNU-IAS、アジア開発銀行、OECD 等にて専門家やコンサルタント業務にも従事される等、多大なる国際的社会貢献を成してきた。

以上のように、氏は都市計画学会ならびに都市計画分野での国際貢献に多大なる貢献を果たしてきており、日本都市計画学会国際交流賞を授与するに相応しいと判断しました。

日本都市計画学会 2022 年 年間優秀論文賞受賞論文

(受賞者敬称略)

Inverse shortest paths problem による嗜好の異質性に基づいた立ち寄り観光地の評価手法
山形県の位置情報データとそのトラベルコストに着目した分析例

羽佐田 紘之、本間 裕大、長橋 陽介、岩瀬 義和

大都市圏郊外住宅地に立地する親世帯住宅の近居子世帯による継承に影響する要因

松本 邦彦、澤木 昌典

東京環状緑地帯から区域区分への転換：英米の参照

秋本 福雄

行政職員の知識・実行力の向上に着目した事前復興計画の策定プロセスに関する考察
和歌山県田辺市の事前復興計画策定に向けた検討を踏まえて

小倉 華子、牧 紀男、平田 隆行、宮定 章、今野 亨

洪水抑制効果に着目した市街地内のグリーンインフラ導入計画シナリオ評価
広島県呉市中央地区を対象とした配置と量の検討

荒木 良太、山鹿 力揮、片野 裕貴、田村 将太、田中 貴宏

神戸市住吉・御影地区における地場産業と住宅地の景観に関する研究
文化的継承性とマンション開発における景観の回帰現象に着目して

山口 秀文、瀬戸口 由佳

津波常習地域の漁業集落における空間整備事業の計画と実態

岩手県内の漁業生産空間・海岸保全施設・生活空間整備に関する事業に着目して

萩原 拓也

2022 年 年間優秀論文賞 選考経過

2022 年年間優秀論文賞は、当該年の 1 月から 12 月に発表された、都市計画論文集掲載論文
(全 182 編) の中から優れた内容を有する論文を学術委員会にて慎重に検討を重ね、授賞候補
を選定した。さらに候補選定結果を理事会に諮って、7 編の授賞が決定した。

(参考)表彰対象

1. 表彰対象 論文
2. 表彰のための選考対象となる論文

表彰当該年の 1 月から 12 月に発表された都市計画論文

論文名	Inverse shortest paths problem による嗜好の異質性に基づいた立ち寄り観光地の評価手法 山形県の位置情報データとそのトラベルコストに着目した分析例
著者	羽佐田 紘之, 本間 裕大, 長橋 陽介, 岩瀬 義和
授賞理由	本論文は、Inverse shortest paths problem (ISP) を観光周遊データに適用することで、観光地の魅力度を定量的に評価しようとする論文である。観光地をネットワークのリンクとして組み込み、その魅力度を観光地リンクの負のコストとして与えるという工夫によって、問題を ISP として定式化することに成功した。提案手法は、従来のトラベルコスト法や離散選択モデルと比べ、選択枝集合の列挙が不要であるなど多くの利点がある。また、嗜好の異質性を考慮した分析が可能であり、山形県の周遊データを利用した分析では、「ニッチ」な観光地を抽出するなど、興味深い結果が得られている。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	大都市圏郊外住宅地に立地する親世帯住宅の近居子世帯による継承に影響する要因
著者	松本 邦彦, 澤木 昌典
授賞理由	本論文は、大都市圏の高齢化が進む郊外住宅地に住む親世帯と、地区内または周辺地域に近居する子世帯の交流や訪問の実態と、そのことが親世帯住宅の継承意向にどの程度影響しているかを明らかにしようとする論文である。評価できる点としては、第一に、親世帯と子世帯を対象としたアンケート調査の分析により、近居理由及び親子間の交流実態と親世帯住宅に対する近居子世帯の継承意向を丹念に分析し、住宅政策の基礎的知見となる重要な内容を整理している。第二に、近居子世帯による親世帯住宅の継承意向に影響する要因について、新規性のある事実を多く指摘しており、近居研究における新しい着眼点を見出している点あげられる。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	東京環状緑地帯から区域区分への転換: 英米の参照
著者	秋本 福雄
授賞理由	本論文は、わが国において区域区分が都市の成長管理手法として導入される過程を、英国の環状緑地帯、米国の開発の時期と順序の地域制、そして東京環状緑地帯の実現に向けた動きと戦後の変化、それぞれの背景や経緯の比較分析を通じて明らかにしたものである。特に後半では、1950 年代以降の石田頼房による米国の手法の紹介と博士論文での大都市周辺地域期別三分論の提案が、主査の高山英華を通じて区域区分制度としての実装に繋がったと考察し、結論づけている。評価すべき点としては第一に、本論文では実に広範・膨大な史料を参照し、英米日の影響関係等を地道に解き明かしている点を挙げることができる。そして第二には、史料に基づく史実を有機的に結び付けて考察することで、わが国の都市計画制度の重要な変化点を、都市計画史の長大な流れの中に位置づけて説明することに成功している点であり、歴史研究として一つの模範となる論文だと評価できる。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	行政職員の知識・実行力の向上に着目した事前復興計画の策定プロセスに関する考察 和歌山県田辺市の事前復興計画策定に向けた検討を踏まえて
著者	小倉 華子, 牧 紀男, 平田 隆行, 宮定 章, 今野 亨
授賞理由	本論文は、近年その重要性が指摘される「事前復興計画」に焦点を当て、そのために行われた実際の職員ワークショップに参加観察し、さらに事後にアンケート調査などを行うことにより、ワークショップを通じた行政職員の認識変化を分析したものである。一連の結果から、より有効な事前復興計画策定のあり方、知識や実行力を高めるための過程ならびにそのための手法などについて考察しており、将来、各自治体で取り込まれる復興の事前準備に取り組みにあたって有用な示唆を得ている。以上より、年間優秀論文にふさわしいと判断された。

論文名	洪水抑制効果に着目した市街地内のグリーンインフラ導入計画シナリオ評価 広島県呉市中央地区を対象とした配置と量の検討
著者	荒木 良太, 山鹿 力揮, 片野 裕貴, 田村 将太, 田中 貴宏
授賞理由	本論文は、グリーンインフラの洪水抑制機能に着目し、広島県呉市を対象に、シミュレーションモデルによりグリーンインフラの効果的な配置と必要導入量を明らかにした。膨大な詳細データを入力し、シミュレーションモデルを構築したことは詳細な浸水範囲の推定を可能にした。平成 30 年 7 月豪雨の浸水範囲を用いて、推定の妥当性も検証している。加えて、グリーンインフラの必要導入量を示す方法を提案したことは、注目に値する。以上より、年間優秀論文にふさわしいと判断された。

論文名	神戸市住吉・御影地区における地場産業と住宅地の景観に関する研究 文化的継承性とマンション開発における景観の回帰現象に着目して
著者	山口 秀文, 瀬戸口 由佳
授賞理由	本論文は、神戸市の住吉・御影地区を対象に、地場産材である御影石を用いた住宅地の形成や変容の実態およびその関係性を明らかにしようとしたものである。文献資料や現地調査、そして多様な関係機関へのヒアリング調査資料等をもとに、丹念な事実関係の整理・分析を行っている点が評価できる。近世以降の時間軸のもと産業との関係性やそのプロセスを明らかにするとともに、その文脈に位置づけられた地域資源の継承性や景観維持のメカニズムを明らかにしようとする点も評価できる。以上より、年間優秀論文にふさわしいと判断された。

論文名	津波常習地域の漁業集落における空間整備事業の計画と実態 岩手県内の漁業生産空間・海岸保全施設・生活空間整備に関する事業に着目して
著者	萩原 拓也
授賞理由	本論文は、津波常習地域の漁業集落を対象に、時系列で空間整備の計画と実態を明らかにしようとする論文である。評価できる点としては、第一に、集落内の基盤空間の集積の傾向や避難施設整備が進まなかった理由を明らかにしている。第二に、津波常襲地域の漁業集落における空間整備事業について資料を丹念に調べ、作成された図や資料的価値も高い。さらに、集落内の基盤空間の集積が相対的に低地部や海岸付近で進んだ背景及び防潮堤の整備が進んだ一方で、避難施設整備が進まなかった事象を明らかにしている。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。